

## 奥村啓吾／咲くやこの花インタビューvol.36

奥村啓吾(おくむら・けいご)【令和4年度 音楽部門[オペラ】】



令和4年度「咲くやこの花賞」《音楽部門》は、オペラ演出家の奥村啓吾さんが受賞しました。贈呈理由として、2022年3月の「カルメン」のハイライト上演と、8月の『大阪国際フェスティバル』でステージングを務め、関西初のロッシーニ「泥棒かささぎ」の全曲上演に貢献されたことが高く評価されました。オペラ生誕の地・イタリアの語学や声楽の発声法、演技法なども熟知している奥村さんは、今後、日本を代表するオペラ演出家として期待される存在の1人です。奥村さんがどのようにして今日まで至ったのか、その軌跡をたどりました。

取材・文／岩本和子

### 「オペラ演出をやりたいなら、イタリアに行かなきゃ」

「咲くやこの花賞」受賞、おめでとうございます。まずは、受賞のご感想を教えてください。

団体での受賞はあるのですが、個人で賞をもらったのは初めてです。しかも生まれ育った街である大阪からいただけるとあって、すごく嬉しかったです。歴代の受賞者には素晴らしい先輩の方々がいるので、背筋が伸びる思いというか、賞に恥じない活動をしていかなきゃいけないなと思いました。

奥村さんは枚方市のご出身で、京都の高校にご入学後、2000年4月に大阪音楽大学音楽学部声楽学科に進学されました。いつから声楽を目指していたのでしょうか？ 音楽遍歴から教えてください。

小さいときはエレクトーンをちょっと習っていたぐらいで、中学校で吹奏楽部に入部しました。3年間、トランペットを吹いて、すごく大好きになって。そのときの夢が「吹奏楽の全国大会で金賞を取りたい」でした。そこで、関西で吹奏楽が強い高校に行こうと、京都の洛南高校に入学しました。それから夢に向かって部活動をしていたのですが、高校1年生のときに全国大会で金賞が獲れたんですよ。それから「楽器で音楽大学に行きたい」と、将来は音楽の仕事をしたいという思いが芽生えて、音大に行くために歌を習いに行きました。そしたら先生に「君は日本人に特殊なバスの声だから」と声楽を勧められて。今、思うと全然バスじゃないんですよ（笑）。けれども、当時は、そういうふうと言われて、ちょっとやってみようかなと声楽を始めました。



オペラとの出会いは、どのようにして訪れたのでしょうか？

転機となったのは大学1年生の時です。有志でミュージカルをしようという話が持ち上がって、誘ってもらったんですね。そこでミュージカルを歌いました。オペラもそこまで観たことがなかったですし、歌で舞台に立つこと自体も初めての世界で。何もわからない状態で先輩にいろいろ教えてもらって、カーテンコールでお客様の拍手を浴びたとき、「俺、舞台が好きだな」と思って、初めて火が着いたというか。そこからオペラの勉強を本気でやり始めました。

その時の作品は何を？

「エリザベート」です。結局、在学中に2回やったんですけど、1年生のときが確か革命家の1人、ジュラという役で、あともう1回は、小さい役を何役かやらせてもらいました。

そのご経験で「舞台をしたい」という思いに火がついて。

そうですね。キャストとしてというより、舞台のことを好きになったという感じです。先輩からいろいろ教えてもらったこともそうですし、舞台の上で表現すること、作品を通してお客さんにどういったものを訴えかけるのかとか、そういうことを学ばせてもらって、それが自分のベースになったかなと思います。「舞台を通してどういったものを伝えられるか」という、そこに喜びを感じましたね。

ご卒業する頃には、演出家を目指していたんですか？

まだ演出家になりたいとは思っていなかったのですが、卒業式の前に4年生だけで集まってコンサートを開いたんですよ。「フィガロの結婚」の第2幕をやろうと言って、歌ったんですけども、その時にちょっと演出みたいなことをやらせてもらいました。いわゆるステージングですね。すごく興味があったので。でも、「演出家になりたい」とは、まだまだ思っはなかつたですね。



ご卒業後、2010年にイタリアに留学されました。それまでの6年間は、どのような活動をされていたんですか？

大学4年生の頃、東京の先生に歌を習い始めていて、このまま先生に習いたいと思って卒

業してすぐに東京に引っ越しました。上京して4年目ぐらいだったかな、2008年に友達と「オペラやろうか」みたいな話になって。ずっと演出に興味があったから、そこで「歌も歌うけど、演出もやってもいい？」と、演出の事は全く知らないけど友達に聞いたんですよね。そしたら快諾してくれて。当初は小規模のステージをイメージしていたのですが、指揮者を入れようか、じゃあ30人編成ぐらいのオーケストラも入れようかと、どんどん規模が大きくなって。それで、これは歌と演出の両方をやるのは無理やなど。しかも演出は初めてなので、「演出1本で頑張ってみるわ」といって、やり始めました。

そうだったんですね。

また、その公演が、なんか知らんけどうまくいってしまったんですよね。お客さんも入ってくれて、黒字になって。それが良かったのか、悪かったのか(笑)。黒字になったから「これは行けるな」と。2回目もやろうぜとなって、今度は大ホールで美術もセットして「カルメン」をやりました。そしたらもう、赤字も赤字、大赤字(笑)。演出の勉強をしたことがなかったので、大ホールの予算とか、全然知らなくて。これはちゃんと勉強しなきゃいけないと思ったのですが、ありがたいことに、その1回、2回と演出をしたことによって、演出の仕事もいただけるようになって。

それは嬉しい反面…。

本当にありがたいことなんですけど、自分自身は全く勉強をしたことがないから、「精一杯頑張りますけど、いいですか」という感じで引き受けさせてもらっていました。でも、やっぱりそれじゃあかんって。ちゃんと勉強しなきゃいけないと。たとえばイタリア人が「歌舞伎の演出をしたいです」と言っても、日本に行ったことがなかったら、「まず、日本に行きなよ」ってなるじゃないですか。それで、オペラだからやっぱりイタリアに行きなきゃいけないなと思って、イタリア行きを決めました。



大学ご卒業後の上京もそうですが、奥村さんはフットワークが軽いですね。

そうですね。本当にこれをしたい、この人につきたいと決めたら、とりあえずできるためにはどうすればいいかということを考えるタイプです。その時も、やっぱりイタリアに行って勉強しないことには、仕事をもらってはいけないなと思って…。

そうしてイタリアへ。最初はどうでしたか。

最初にイタリアに行ったときに知ったのですが、イタリアでもオペラ演出を勉強するところがほとんどなかったんですよ。そういう情報も全然入ってこなくて…。

いきなり壁が立ちはだかりますね。

演出するにはイタリア語が絶対必要じゃないですか。まずは語学を勉強して、歌の技術を知っていると演出で生かすことができると思って、イタリアのマエストロに歌も習っていました。その間に演出の勉強するチャンスを探ってたという感じですね

イタリアは、最初はどこらに行かれたんですか？

「オペラといえばイタリアのミラノ・スカラ座」。ということで、とりあえずミラノに住みました。もう、がむしゃらでしたね。でも、結局、スカラ座では演出の勉強はできなくて。それこそ、スカラ座の芸術監督に「私は日本人でオペラの演出の勉強をしたい。ちょっと見学させてくれませんか」みたいな事を書いた手紙を楽屋口で渡したり。その時は「グラツェ、グラツェ」と言って受け取ってくれますが、読んでくれているのもわかるんですよ。アカデミーの合唱の指揮をやっている人と知り合いになって相談したり。それも無理で。最後はスカラ座の門番と仲良くなって(笑)。僕、誰とでもしゃべれるタイプなので、とりあえず劇場の中に入りたくて門番と仲良くなって。門番に「ちょっとでもいいから中に入れてくれへんか」って言ったのですが、やはりだめで。結局、スカラ座だけ、いまだに入れてないんですよ。



そうだったんですね。演出を学ぶ道を探りながらの日々で。

オペラ演出の勉強をしにイタリアに来たのに、勉強ができないという状況でした。で、あるとき、ミラノから近いベルガモという街で「リゴレット」をやると知って、何気なく観に行っただけです。そうすると、劇場のチケット売り場で、イタリアに行く前に日本で演出した公演に出ている方がいて、「今日の指揮者は日本人だよ」と教えてくれたんです。それで、公演後に楽屋挨拶に行くことになったんですね。その時の指揮者が吉田裕史さんでした。

吉田さんとの出会いも気になりますね。

そこで吉田さんに「オペラ演出の勉強がしたくてイタリアに来ているけど、全然、勉強できない」ということをお話したら、後日、吉田さんから連絡が来て、「来月からノヴァーラで『蝶々夫人』を指揮するけど来る？」っていう感じで。その現場に吉田さんと入らせてもらって、ついにイタリア人の演出家を紹介してもらいました。

その時点で、イタリアに住んでどのくらい経っていたんですか？

2年弱ぐらいだったと思いますね。確か。

長かったですね。その間に諦めようとか、そういうことを考えることはなく？

そうですね、そのへんは諦めが悪い男かもしれないですね(笑)。演出の勉強のためにイタリアに行ったので、もうお金が尽きるまではイタリアにしよう。お金がなくなったらしょうがないという感じでした。



「僕の人生は本当に運がいいなと思います」

そうやって道筋ができましたが、その後は？

そこからはイタリアの劇場にいくつか入らせていただいて、一応、仕事もいただけるようになったのですが、全然、暮らしてはいけないんですよね。まだまだ稼げるようなものではなくて。その間に結婚して、子供も二人目ができて、ちょっと経済的にも大変だねという話になって、帰国しました。それが 2013 年ぐらいでした。

そうだったんですね。

僕の人生は本当に運がいいなと思うのですが、イタリアにいるときから「堺シティオペラ」のプロデューサーをされている坂口菜里先生と Facebook でつながっていて、帰国する際に先生に久しぶりにメッセージ送ったんです。そしたら、「今度、栗國淳さんの演出でオペラをやるから、演出助手はもう決まっているけど、演出部のチームで入ってみる？」みたいなお話をくださって。イタリアから帰っても仕事がなかったので、「ぜひやらしてください！」と。そうすると、そのプロジェクトが始まる前に演出助手の方が辞められて。



ちょうど席が空いて。

それで「奥村くん、演出助手やる？」みたいな感じになって。ありがたいことに栗國淳さんの演出助手をいきなりやらせてもらえることになりました。栗國さんには、もう本当に、手取り足取り教えてもらって、堺市の公演が終わってからも4年間ぐらいかな？ いろんな現場に呼んでもらえるようになって、基礎から教えてもらいました。栗國さんには感謝しかありません。

そうして2017年まで栗國さんの演出助手をされて、2018年にまたイタリアへ。この時にヴェローナオペラアカデミーに行かれたんですね。

これは1回目のイタリアで出会った吉田さんの繋がりで、さわかみオペラ財団からヴェローナにあるオペラ演出を学べるアカデミーに行かせてもらうことになりました。そこでは、劇場法やオペラの歴史、クラシックの歴史とか、いろんなことを学びました。そしてコロナ禍になる前、2019年の4月ごろに日本に帰ってきました。

2004年に大学を卒業して、約15年ですね。演出家としての修行はここでいったん終了という感じですか？

いや、まだまだです。栗國さんたちの足元にも及びません。それこそ、2022年7月に兵庫県立芸術文化センターで「ラ・ボエーム」の演出助手をさせていただきましたが、公演は、ダンテ・フェレッティさんという方が演出で。彼はアカデミー賞も受賞している方で。彼の演出補としてマリナ・ビアンキさんという、ミラノ・スカラ座の座付き演出をされていて、今でもスカラ座のアカデミー研修所という世界で一番の研修所で演出をされている方も来られて。ビアンキさんのそ

ばにいて、もっと勉強しなきゃいけないと改めて思い知らされました。



### 「オペラって、生きる活力にもなる」

現在は日本各地でオペラの公演を手がけていらっしゃいます。いわゆる土地柄はありますか？

ありますね。今、徳島と福島・喜多方、そして枚方でオペラをやっていますが、徳島の皆さんは阿波踊りの文化があるからか、「踊る阿呆に見る阿呆」の気質なんですよ。「オペラは知らんけど、誘われたしやってみよう」みたいな。福島・喜多方の方はめっちゃくちゃ真面目です。枚方の方は徳島の方のようにオペラを楽しんでいらっしゃいます。枚方では昔、80 いくつのおばあちゃんが合唱にも出てくださって、「先生、すごく楽しかった。来年も絶対やってよ！」って。「来年、このオペラに出るために頑張るから」みたいなことをおっしゃって、その言葉を聞いてすごく嬉しかったですね。オペラって生きる活力にもなるんだなって。だからこそ、もっともっとオペラの良さを皆さんに伝えていければと思いました。

そのためにも、今後はどうしていきたいとお考えでしょうか。

ふたつあると思っています。ひとつは、オペラを観て、鳥肌が立って、涙が勝手に出てきたとか、そういったクオリティが高いものを作って、たくさんのお客さんに観ていただくこと。もうひとつは、徳島とか喜多方、枚方のように、合唱もやったことがない、カラオケしか歌ったことがないという方にもオペラに参加してもらって、肌で感じてもらいたいと考えています。オペラを歌うことを楽しいと感じてもらえたらと思っています。

オペラの一番の魅力をお伝えするとしたら何と？

一番は人間の声の魅力です。声の魅力って、良さだけでもないんですよね。そのときのキャラクターの感情が乗った声が心を震わせる。だから、本当に素晴らしい歌手のオペラを観ると、感情が揺さぶられて、勝手に涙してしまうこともあって。そこが魅力かなと思います。

最後に毎年、受賞者にお聞きしている恒例の質問をしますね。奥村さんが「咲くやこの花賞」を贈りたいと思う、大阪市の好きなところを教えてください。

僕、お笑いが好きで。笑うってすごくいいことじゃないですか。人生を笑って過ごせたらいいなと思っていて。笑いのある大阪の、人情というか、人柄というか、そういうところが好きですね。

